

拉致問題と「感情の錬金術」

— 小泉劇場における横田・ブッシュ会見劇を眺めながら —

鄭敬謨

偶然か、それとも必然か？

去る四月二十八日は、記憶に値する特別な日であったように思う。愛国主義を鼓吹するための「教育基本法改訂案」が国会に上程されたかと思うと、戦前の治安維持法の再来であろうか、「共謀罪」を含む新しい法律（組織犯罪処罰法）が同時に上程された。そればかりではない。この日を期して、「北朝鮮人権法」が議員立法の形で上程されている。

しかもこれと符節を合わせるが如く、四月十八日、東京を出港した海上保安庁の調査船二隻を島根沖の海上に遊弋させ、いつでも紛争の島独島（竹島）の海域に突入せんばかりの態勢を取らせることにより隣国との緊張がピークに達しているさなか、日本政府は拉致被害者横田めぐみさんの母親早紀江さんをワシントンに派遣、ブッシュとの会見を実現させるというスタント（離れ業）を演じさせた（日本時間四月二十九日未明）。以上一連の出来事は、決して偶然の一致ではない。緻密な計画に基いて巧みに演出された小泉政権の演劇であった。

これに関連して記憶に甦ってくるの

は、公職追放令の廃止（一九五二年）と共にいち早く政界に復帰し、瞬く間に政権の座に就いたかつてのA級戦犯岸信介のことである。そして彼が三期総理を務めている間（五七・六〇年）渾身の力をこめて達成しようとした政治目標が、①平和憲法の撤廃、②再軍備の達成、③治安維持法の復活の三点に要約されるものであったということだ。

しかし六〇年安保闘争の騒乱の中、涙を吞んで岸が政権の座を降りて以来、何れの内閣においても岸の目指した終生の目標は達成されなかった。岸の志に最も忠実たらんとした政治家は恐らく中曽根だっただろうと思うが、剛腕で知られたその中曽根の力をもつてしても、それは可能ではなかったのである。

私の古いノートによると、通産大臣時代の中曽根は一九七三年四月一日、東京の外人記者クラブで演説したさい二つのことを主張した。その一つは、日本の海上自衛隊の哨戒距離を一〇〇〇キロに伸ばしたいということであり、二つ目はその時点から五年後、つまり一九七七年には、第九条の撤廃を含めて現行の平和憲法を改訂するための国民投票を実施した

い、ということであった。因みに中曽根のこの発言は外人記者クラブで行なわれたせい、私が目にしていて日本の新聞にはどこにも報道されておらず、英字紙『ジャパン・タイムズ』で見つけてノートに書きとめておいたものである。

このように、岸信介が権力の座に就いて以来半世紀にわたり歴代の内閣が注いできた執拗な努力にも拘らず、岸の悲願であり、同時に日本の保守勢力が目指してきた三つの政治目標は常に高嶺の花のままであった。

ところがこのような閉塞状態は、いま劇的に変わったと言ってよい。つまり岸以来の三つのターゲットは、小泉「劇場」内閣の演出により、少くとも次の内閣になれば容易に手の届く至近距離にまでたぐり寄せられている。しかも小泉総理が意中の後継者として後押ししている人物が安倍晋三であって、岸信介の孫ときてみれば、これを単なる偶然だと見逃してよいのか、判断に迷わざるを得ない。

小泉「劇場」における拉致事件の意義

「感情の錬金術」という言葉があつて、これは『靖国問題』（ちくま新書）の中で著者の高橋哲哉氏が披露した彼の造語であるが、戦場で斃れた死者を悼む悲嘆の気持ちを、歓喜の念に転換させる点に

において、靖国神社は正に「感情の錬金術」を可能ならしめた国家の有用な施設だというのが、高橋氏の指摘である。これを念頭において考えるとき、拉致問題という装置を通して小泉「劇場」が巧みに演じて見せたのが「感情の錬金術」であったというのが私の判断である。

今までは加害者として糾弾されがちであったのが、日本人の立場であった。それが拉致問題を契機として日本人全体が横田めぐみさんの親御さんと心理的な一致をとげ、逆に自分たちこそが被害者であったという新たな立場を獲得したのである。日本自身が犯したかつての国家犯罪を一切不問に付した上でこのような立場の逆転は、日本人の鬱屈した心理状態に快感にも似たカタルシスを与えた点においてまさしく「感情の錬金術」であったのだ。そしてこの巧みな「錬金術」を可能ならしめたのが、北朝鮮があたかも悪魔の巣窟であるかのような激烈なヘイトキャンペーンである。しかもこのヘイトキャンペーンの先頭で旗を振ったのが岸信介の孫安倍晋三であったのは、誠に象徴的だと言わざるを得ない。

横田夫人のワシントン訪問が物語るもの

東条を含む七人のA級戦犯が処刑されたのは一九四八年十月二十三日である

が、同じくA級戦犯であった岸信介が無罪放免で巣鴨拘留所から釈放されたのはその翌日、つまりその年のクリスマス・イーブの日であった。獄門を出た岸が、当時吉田内閣の官房長官を務めていた佐藤栄作の官邸に直行し、夕食として予め所望しておいたマグロのトロで舌鼓を打ったというのは、ずいぶんと人口に膾炙されたエピソードであるが、実を言えば岸は獄中にいたときから、OSS（CIAの前身）を通じてワシントン当局からの接触を受けており、釈放された後自分が首相になった後果すべき任務が何であるかということを知っていたのである。最近とみに慌しい動きを見せている日米間の軍事的一体化は、半世紀前のあの頃すでに岸に課せられていた三項目の任務の達成が最終段階に至ったことを示すものであるが、岸が生前果たすべくして果しえなかつた任務が、近頃になって（小泉の手で）達成の域に接近し得た裏に、横田めぐみさんの拉致事件が大きな役割を演じたことは、前述の通りである。

膳立てで拉致被害者家族団がワシントンを訪れ政府の要路と接触する時、彼らがアメリカに要求してやまなかつたのは北朝鮮のレジーム・チェンジ（政権交替）であった。これは取りも直さず先制攻撃による軍事行動の要求に外ならない。日本政府もまた、軍事的利用価値の側面から横田めぐみさん拉致事件を捉えてきたという諷りを免れないだろう。ブッシュに会った時の印象を横田夫人は「善と悪をきちんと弁えている人」といったようだが、これを聞きながら私は、アメリカの特別な計らいで無罪放免の恩典に浴した岸信介の心境がどんなものであったか、推量せざるを得なかつた。彼からすればアメリカは絶対的な善であっただろう。そしてアメリカが敵と見なす国は自動的に悪であつたはずだ。以来日本は、岸流のDNAを引き継ぎ、善悪の判断をアメリカに一任する国としてあり続けてきたのではあるまいか。

九条を守らんとする日本の平和勢力は、この点を憂慮してきたのだと思う。アメリカが勝手に起こした戦争に日本が巻き込まれるのではあるまいか、と。だが、拉致騒動以後の情勢は逆ではないのか。日本が先に手出しをしてアメリカを巻き込むシナリオのことだ。真に憂うべきは北朝鮮か、日本か？